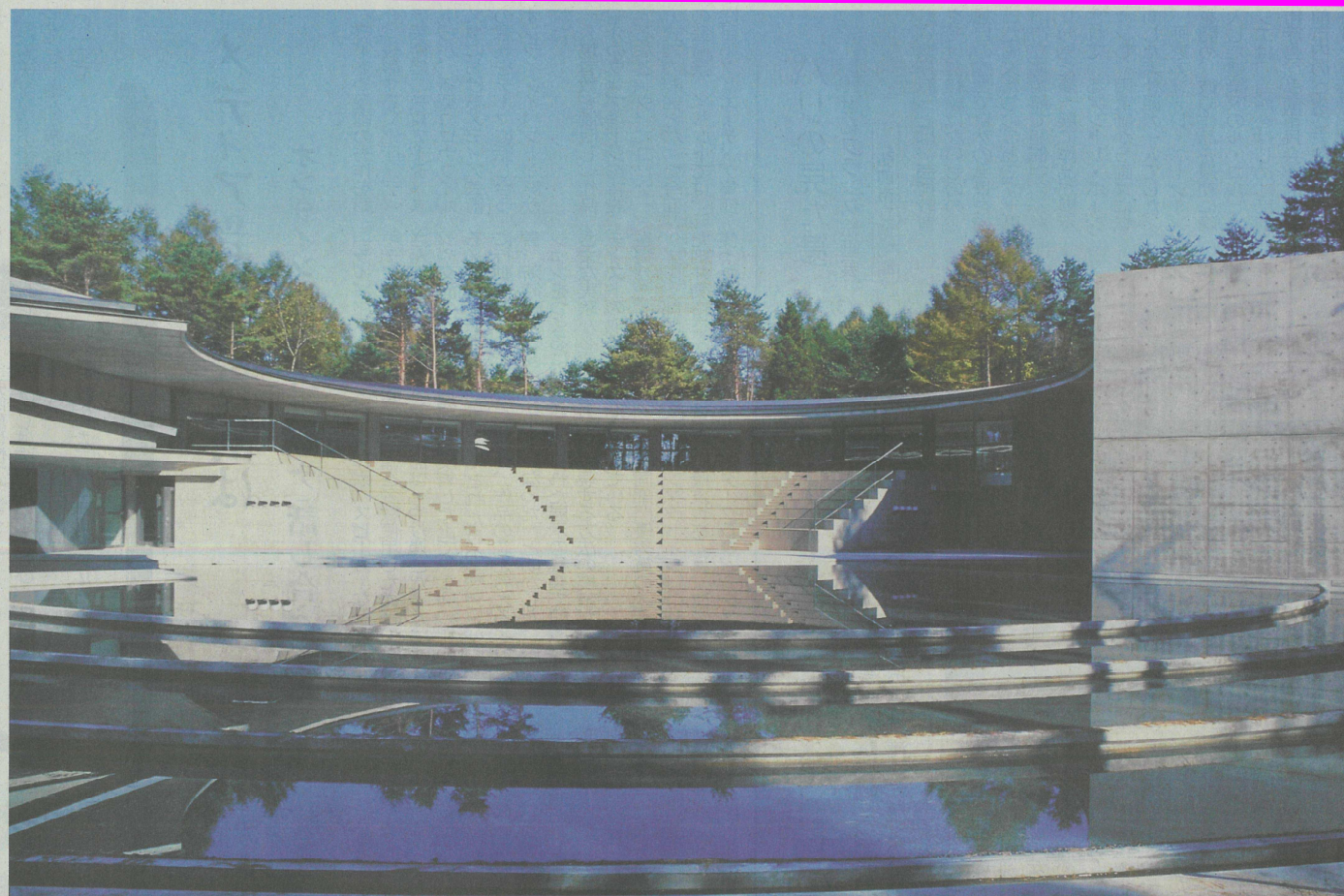


(2001年撮影、青森公立大学国際芸術センター青森提供)



安藤忠雄設計「青森公立大学国際芸術センター青森」

(2001年、3棟分棟型、鉄筋コンクリート造)

青森公立大学国際芸術センター青森(ACAC)はアーティスト・イン・レジデンス(AIR)プログラムを中心とするアートセンターです。美術館のようなコレクションはありませんが、安藤忠雄が手掛けた特徴的な建築を目当てに国内外から多くの方が訪れます。建物全体を自然の中に埋没させる「見えない建築」をコンセプトに、2001年12月の開館に先駆け同年11月に建てられました。宿泊棟・創作棟・展示棟と三つの建物と四季のアーケードは機能を固定しない「がらんどつ」の空間としてアーティストを刺激し、雪とといった自然環境も含めて全体が展示空間となるよう意図されています。さらに安藤は一貫して「育てる」という言葉で、建築のつくり手の限界と使用する人たちの創造的な可能性についても語っています。

開館から変わらずアーティストの創造性を刺激してきました。例えば、2007年春のAIRに参加したパラモデルは展示棟全体に作品を展開させました。今でも建物の

アート
の森

④

県内美術館コレクションから

アーティストの創造性刺激

アートの森 ④

県内美術館コレクションから

青森公立大学国際芸術
センター青森学芸員



村上 綾

次回は(仮称)八戸市新美術館の作品を紹介します

青森公立大学国際芸術センター青森ACACはアーティスト・イン・レジデンス(AIR)プログラムを中心とするアートセンターです。美術館のようなコレクションはありませんが、安藤忠雄が手掛けた特徴的な建築を日当てに国内外から多くの方が訪れます。

建物全体を自然の中に埋没させる「見えない建築」をコンセプトに、2001年12月の開館に先駆け同年11月に建てられました。宿泊棟・創作棟・展示棟と三つの建物と四季のアーケードは、機能を固定しない「がらんどう」の空間としてアーティストを刺激し、雪と雨といった自然環境も含めて全体が展示空間となるよう意図されています。さらに安藤は一貫して「育てる」という言葉で、建築のつくり手の限界と使用する人たちの創造的な可能性についても語っています。

開館から変わらずアーティストの創造性を刺激してきました。例えば、2007年春のAIRに参加したパラモデルは展示棟全体に作品を展開させました。今でも建物の

アーティストの創造性刺激

一部に残るキャプションが、その大きさを想像させます。12年に個展を開催した浅井裕介は、宿泊棟近くの通路や創作棟など複数の場所にも作品を残しています。同年にassistantが取り組んだ「無名の建築(33年目の家、習作)」などカープした壁や窓から自然光の入るギャラリーだからこそ構想され・実現した作品も少なくありません。

一方、変わっていくこともあります。鏡のように磨かれたギャラリーの床には彫刻作品を固定した際にあいた穴があったり、天井に見える結露の跡など、その時の工夫や確かに経過した時間を建築は語っています。

ACACにはコレクション作品はありませんが、その時々に合わせて使用されてきた建築作品があると言えるのかもしれないと。一人の建築家の作品としてだけではなく、使用する側の意図や、自然環境によっても日々変化が重なってきた場所だと考えながら、改めてACACの建築を楽しんでいただけたらうれしいです。